

バナナって種がないよ？

石垣市立みやなが幼稚園（沖縄県石垣市）

[5歳児]

園庭で拾った木の实から、その実がなっている木や食べられる実が否かなどに興味をもったことをきっかけに、敷地内の散策をした。モモタマナ、アカギ、イヌマキ、ヤラブ、クロキ、シマヤマヒハツ、ソテツ、シークワサーナなどを見つけて思ったことや感じたことを話したり、いろいろな木や実の話聞いて興味を深めたりした。その後木の実への関心が高まり、園庭の木の実を集めてはままごとに使ったり、中を開けて種を出したりして遊んでいた。（園舎裏側にはバナナの木が数本あり、毎年バナナの実がなっていて、大きくなったら収穫し、黄色く熟したら食べている）

事例1 バナナは木の实だよ

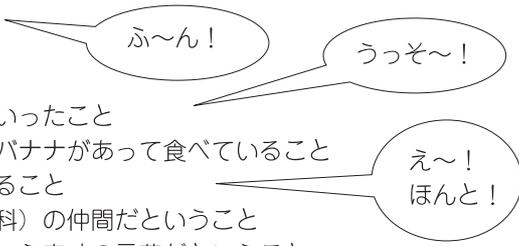
保育者＝T

A児「先生！バナナは木の实だよ」と言い、T「そうよ」と答え、A児は「それじゃあ、何でバナナには種がないの？だってイヌマキやクロキとか木の实には種があるでしょ？それなのにバナナには種がないよ。種がないのどうやってバナナの木は生えてくるの？」と続けた。「そうねー」と保育者が受け止めると、側で聞いていた子が「バナナの種見たことあるよ！」「嘘だー！」「食べたらあったもん！」「嘘だー！嘘つき！」「ホントだよ！」と言い、何やら雲行きが怪しくなってきた。そこで保育者が「ちょっと待って、そうだねーバナナの種、先生も見ただことないね、ホントに種もないのどうやってできるんだろ、もしかしたら種があるのかもしれないね、調べてみようか？」と提案すると「うん、調べよう！」「最初にバナナの種を蒔いた人がいるんじゃない…誰かな？」「先生じゃないよね」T「先生が来た時はもうバナナの木はあったよ」などとやりとりの末、バナナのことを調べることになる。

- ①いろいろな本で調べるが、幼稚園の図鑑ではあまり詳しいことが載っていない。
「だめだねー」「小学校の図書館ならあるかな」「市立図書館の方がいいんじゃない」「パソコンは？」
「うちのお父さんも、何でもパソコンで調べよ」
「先生！パソコンで調べてよ！」



- ②保育者がパソコンで調べる。
 - バナナはずーっと大昔からあること（紀元前5千年から1万年前）
 - マレーシアやフィリピンがだいたい原産地であること
 - 昔々は種があったこと
 - 偶然種なしバナナが生まれたこと
 - 種がないので「株」で増やしたこと
 - その株がどんどん世界中に広まっていったこと
 - 今でもフィリピンとかには種ありのバナナがあって食べていること
 - よく見るとバナナの中に種の跡があること
 - バナナは木じゃなくて草（パショウ科）の仲間だということ
 - バナナはアフリカの言葉で「指」という意味の言葉だということ
- ③調べて知ったことから「やっぱり、種があると思ったよ！」「葉っぱの仲間なんだ？」「株ってな～に？」「誰が種のないバナナを見つけたのかな？」と話し合う。



園のバナナの木

- ④「休んでいる友達にも知らせてあげよう」ということになる。“バナナの秘密”をどうやったらわかり易く知らせることができるか、みんなで考える。
- ⑤話し合うが難しいというやりとりになり、バナナの話でわかったことを出し合うことにする。
「昔々は種を蒔いたこと」
「突然、種のないバナナができたこと」
「そのバナナの草を植えて、どんどんバナナができたこと」
「バナナは木じゃなくて、葉っぱの仲間っていうこと」
- ⑥今話し合った「わかったこと」を、「最初は種だった」ことから、「順番に書く。紙芝居みたいにね」ということになる。



「種が大きすぎるよ！」
「スーパーのバナナってこんな？」
「種のないバナナだから、違う色で描こうか？」
「バナナの草？」

紙芝居 「バナナの不思議」

昔々、ずーっと大昔、みんなのおじいさんも、そのまたおじいさんもまだ、生まれていない時、バナナには種がありました。



よいしょ！こらしょ！どっこいしょ！
よいしょ！こらしょ！どっこいしょ！
おじいさんたちはせっせと畑を耕しバナナの種をたくさん蒔きました。
「お～い 太郎どん、そっちにも種蒔いとくれ～」「まかせてとけー」そう言いながら力を合わせて、バナナを育てました。



ところが、ある日のこと、たくさんバナナの中から、種の入っていない不思議なバナナができました。

「おや、ま～、これはいったいどうしたことでしょう！」試しに食べてみると、種がないので、おいしい実をまるごと食べられ、みんな大喜び。なんとかしてこのバナナを増やせないかと皆で知恵を出し合って考えました。そして、バナナの本の下の方に生えている若い芽を取って植えてみることにしました。



するとどうでしょう？

株から分けて作られたバナナは、どんどん大きくなりました。そして又株を分けて…又バナナができて…又株を分けて、またバナナができてと、繰り返しているうちに、どんどん作られていきました。種のないバナナはお百姓さんから大切にされ、どんどん増えて世界中の国に広がって作られるようになりました。



…ということで今では、スーパーに、いつでもバナナが売られています。そして、ほら、バナナの一本、一本の形…何かに似ているでしょう…

そう！指の形！バナナという言葉は、アフリカの言葉で「指」という意味があるそうですよ。これで、バナナの種の不思議は分かりましたか？ところで皆さん、バナナの不思議はまだありますよ…それはね…



バナナはなんと草の仲間です。
木ではありません。

バナナの幹の中は草が何十にも巻いていて木のように堅くなっているそうです。あっ！それとバナナは栄養があって、とても美味しいですよ。皆さんもどんどん食べましょう！これで「バナナのご不思議」のお話は終わりです。
トッピンシャラリンまたね～



事例2 緑のバナナには種がある!?

<種なしバナナの話をしている時>

「黄色いバナナは種がないけど、緑色のバナナには種があるんじゃない？」という話題になる。

そこで、庭から熟していない緑のバナナ（本園のバナナは島バナナなので小さい）を取って来て、切ってみる。

「種があった!」「ホントだ!」「ね、言った通りでしょう!」…実際、黒くて種らしきものがある。（熟す前は種のなごりが多く見られるようだ。）



これがバナナの種です。原産国では種入りのバナナを食べています。

これはバナナの子ども「株」です。

考察

幼児の何気ない疑問から発した事例だが、園の環境にバナナがあったことが、「不思議」につながった。身近な果物の不思議を知ること、他の果物にも興味が出て、「パイナップルだって種がない？」などという声があった。一つのきっかけから他の物も探る。「まさしく『科学する心』だ」と感じた。バナナに対する知識の深まりと紙芝居作りという共同作業を通しての人とのかかわり、毎日見ているバナナのご不思議を感じ取る「目」が育ってきている。また、保育者が幼児の何気ないつぶやきを拾い上げ、保育者自身も不思議と感じたことが調べたり、工夫したりすることにつながった。幼児と同じ目線で、考えたり、感じたりすることも幼児理解へとつながる。

ポイント

園内に様々な実のなる木があり、木の実への関心が高くなったことがきっかけになり「バナナの種や不思議」を探求していきました。自然環境が身近にあるだけでなく、興味深い環境になることの必要性が伝わってきます。思いもよらない疑問に、保育者も子どもと共に不思議を感じ、知る喜びを味わっていることで、新鮮で貴重な探求となり、子どもたちの意欲や自信に結びつきました。そして「伝えたい」という展開になり、具体的な表現を考えることで、疑問やわかったことが明確になっています。これらの過程で保育者は、子どもたちの「科学する心」が育まれていることを実感することができ、幼児理解を深めています。